ランプのしんつくり　　シベリア

昔むかし、ランプのしんを作って、毎日毎晩をすごしている男がいた。男は、生まれてからいちども、人間の男にも女にも会ったことがなかった。

あるとき、ランプのしんつくりは、ひとりごとをいった。

「さあ、いよいよ、出かけるぞ。男や女のいる世の中を見てこよう」

ランプのしんつくりは、すぐに旅に出た。どんどん歩いていくと、ひとりの男に会った。男は、七羽のがちょうをなわでしばって肩にかついで歩いていた。ランプのしんつくりは、大声で呼びかけた。

「おおい、あんたの七羽のがちょうと、わたしのランプのしんと、交換しよう」

「ランプのしんなんて、なんの役に立つんだい」

「なんの役に立つかって。ランプのしんのたましいは、嫁探しに行くときや戦いに出かけるときに、とても力になってくれるのさ」

がちょうをかついだ男は、

「おれは、嫁探しに行くときや戦いに出かけるときは、この七羽のがちょうのたましいを連れて行くことにしているんだ」といった。

「そうかい、それならますますけっこう。交換しようぜ」

「いいや、ごめんだね」

男がことわると、ランプのしんつくりは、ランプのしんを取りだして、ふっと息を吹きかけた。ランプのしんは、たちまち赤く燃えあがった。

「どうだい。わたしはこうやって、敵にとどめをさすのさ」

ランプのしんつくりは、そういったかと思うと、もういちど、ランプのしんにふっと息を吹きかけた。ほのおは、いっそう高く燃えあがり、火花を高く高くうちあげた。火花は、すすのように黒い雲のへりまで飛びあがった。ランプのしんつくりがしんの上に手を置くと、火はたちまち消えた。

「どうだい、わかっただろう。これでも交換はいやか」

「いや、気に入った。交換しよう」

男は、ランプのしんを受けとった。

ランプのしんつくりは、七羽のがちょうを受けとると、背中にかついで歩いていった。しばらくいくと、がちょうたちに、凍った肉と解かしたあぶらみを食べさせてやっていった。

「おまえたち、もう自分の足で立てるだろう」

「もちろんです」

がちょうたちが自分の足で地面に立つと、ランプのしんつくりは、やっと背中が楽になった。がちょうたちは、

「あの男のところへ行って、ランプのしんを取りかえしてきましょうか」といったかと思うと、さっきまで自分たちをかついでいた男を追いかけていって、ランプのしんを取りかえしてきた。

それから、ランプのしんつくりと七羽のがちょうは、旅を続けた。
どんどん、どんどん歩いていくと、またひとりの男に会った。男は、首に、大きな木のかぎをぶら下げていた。ランプのしんつくりは、大声で呼びかけた。
「おおい、あんたの木のかぎと、わたしのランプのしんと、交換しよう」
「交換なんていやだね。嫁探しに行くときも戦いに出かけるときも、この木のかぎのたましいがおれを守ってくれるんだ。ランプのしんなんて、なんの役に立つんだ」
ランプのしんつくりは、これには答えず、ランプのしんに、ふっと息を吹きかけた。たちまち赤いほのおが燃えあがり、火花がすすのように黒い雲のへりまで高く飛びあがった。
「わかっただろう。わたしはいつもこうやって、人生をきりぬけてきたんだよ」
「いや、気に入った。交換しよう」
男は、ランプのしんを受けとった。
ランプのしんつくりは、しばらくいくと、木のかぎにいった。
「おまえ、もう自分の足で立てるだろう」
「もちろんです」
木のかぎが自分の足で地面に立つと、ランプのしんつくりは、首がずいぶん楽になた。木のかぎは、
「ランプのしんを取りかえしてきましょうか」といったかと思うと、さっきまで自分を首にぶら下げていた男を追いかけていって、ランプのしんを取りかえしてきた。
それから、ランプのしんつくりと七羽のがちょうと木のかぎは、旅を続けた。
どんどん、どんどん歩いていくと、麻のむちをかついだ男に会った。ランプのしんつくりは、大声で呼びかけた。
「おおい、あんたの麻のむちと、わたしのランプのしんと、交換しよう」
「交換なんていやだね。嫁探しに行くときも戦いに出かけるときも、この麻のむちのたましいがおれを守ってくれるんだ。ランプのしんなんて、なんの役に立つんだ」
そこで、ランプのしんつくりは、ランプのしんに、ふっと息を吹きかけた。たちまち赤いほのおが燃えあがり、火花がすすのように黒い雲のへりまで高く飛びあがった。
「どうだい。交換しようじゃないか」
「いや、気に入った。交換しよう」
ランプのしんつくりは、ランプのしんを男に渡して、麻のむちを受けとりました。
しばらくいくと、ランプのしんつくりは、麻のむちにいった。
「おまえ、もう自分の足で立てるだろう」
「もちろんです」
麻のむちが自分の足で地面に立つと、ランプのしんつくりは、肩が楽になった。麻のむちは、
「ランプのしんを取りかえしてきましょうか」といったかと思うと、さっきまで自分をかついでいた男を追いかけていって、ランプのしんを取りかえしてきた。
それからみんなはまた、旅を続けた。
どんどん、どんどん歩いて行くと、おのをかついだ男に会った。ランプのしんつくりは、

大声で呼びかけた。
「おおい、あんたのおのと、わたしのランプのしんと、交換しよう」
「交換なんていやだね。嫁探しに行くときも戦いに出かけるときも、このおののたましいがおれを守ってくれるんだ。ランプのしんなんて、なんの役に立つんだ」
そこで、ランプのしんつくりは、ランプのしんに、ふっと息を吹きかけた。たちまち赤いほのおが燃えあがり、火花がすすのように黒い雲のへりまで高く飛びあがった。
「どうだい。交換しようじゃないか」
「いや、気に入った。交換しよう」
ランプのしんつくりは、ランプのしんを男に渡して、おのを受けとった。
しばらく行くと、ランプのしんつくりは、おのにいった。
「おまえ、自分の足で立てるだろう」
「もちろんです」
おのが自分の足で地面に立つと、ランプのしんつくりは、肩が楽になった。おのは、
「ランプのしんをとり返してきましょうか」といったかと思うと、さっきまで自分をかついでいた男と追いかけて行って、ランプのしんを取りかえしてきた。
それからみんなはまた、旅を続けた。
どんどん、どんどん歩いていくと、またひとりの男に会った。男は銀の糸玉を持っていた。ランプのしんつくりは、大声で呼びかけた。
「おおい、あんたの銀の糸玉と、わたしのランプのしんと、交換しよう」
「いやだね。この糸玉がなければ、沼や川を渡れないじゃないか」
ランプのしんつくりは、
「これがあればもっとうまくいくんだぞ。見ててごらん」といって、ランプのしんに、ふっと息を吹きかけた。たちまち赤いほのおが燃えあがり、火花がすすのように黒い雲のへりまで飛びあがった。
「どうだい。交換しようじゃないか」
「いや、気に入った。交換しよう」
ランプのしんつくりは、ランプのしんを男に渡して、銀の糸玉を受けとった。
しばらくいくと、ランプのしんつくりは、銀の糸玉にいった。
「おまえ、もう自分の足で立てるだろう」
「もちろんですよ」
というわけで、ランプのしんつくりは、また楽になった。銀の糸玉は、
「ランプのしんを取りかえしてきましょうか」といったかと思うと、すぐさまランプのしんを取りかえしてきた。
ランプのしんつくりは、みんなをもてなしてやった。銀の糸玉も、おのも、麻のむちも、木のかぎも、七羽のがちょうも、みんな、凍った肉と解かしたあぶらみをごちそうになった。すると、みんなの体から、影のたましいが抜けだしていって、自分たちの前の持ち主をひとり残らず殺してしまった。
それからまた、みんなは旅を続けた。

どんどん、どんどん歩いていくと、海岸に着いた。海をはさんだむこう岸に、王の住んでいる町があった。それを見ると、おのが、すぐに同じような町を作りはじめた。おのは、飛んでいって木を切り、それをひきずってきて、昼も夜も休みなく働いた。木を切っては土台を作り、また木を切っては柱をつくり、最初の家を建てた。最初の家には、ランプのしんつくりが住んだ。

最初の家ができると、またつぎの家にとりかかり、おのは、つぎつぎに家を建てていった。ところがとつぜん、ぼろぼろの服を着た男が現れて、おのの後をついてまわり、おのをじっと見つめた。おのは気が散って仕事ができない。そこで最初の家に逃げこむと、男もついて入ってきた。ランプのしんつくりは、

「おまえはここへ何をしに来たんだ」ときいたが、男は答えない。そこで、みんなに、

「こいつをやっつけてしまえ」と命じた。みんなは、いっせいに男にとびかかり、なぐったりかみついたり、とうとうしばりあげてしまった。男は小さくちぢんでしまった。

ランプのしんつくりは、ランプのしんを部屋の真ん中に置いて、ふっと息を吹きかけた。ほのおが高く上がった。しばらくたって、ランプのしんつくりがしんの上に手を置くと、ほのおは、たちまち消えた。見ると、ぼろぼろの服を着た男は、かげも形もなくなっていた。

おのは、ふたたび、家を建て、町を作りつづけた。

まもなく、ランプのしんつくりは、妻を迎えようと思った。そこで、銀の糸玉を持って、王の住む町へ向かった。海岸に出ると、糸玉の糸がするするとのびて、海の向こうまでとどいた。ランプのしんつくりは、糸の上を渡っていった。

どんどん、どんどん歩いて、やっと町に着いた。ある家の前に来たが、その家には、戸口もけむ出しの穴もなかった。

(いったいどうやったら、中に入れるんだろう)

ランプのしんつくりと銀の糸玉は、家のまわりをよく調べ、やっと、壁に小さな穴をひとつ見つけた。キツツキが虫をとるためにあけたような小さな穴だ。中をのぞくと、石のような胸をした英雄が七人、座って見張りをしていた。

銀の糸玉は、穴をくぐり抜けて中へ入り、七人の英雄を糸でがんじがらめにしばってしまった。ランプのしんつくりは、中へ入っていった。

家の中に、目のさめるような美しい娘がいた。どんなバラの花よりも、どんな木イチゴの花よりも美しい娘だった。ランプのしんつくりは、四回声をかけて娘をふり向かせ、妻になることを約束してもらった。それから、ふたりは、銀の糸玉といっしょにランプのしんつくりの家に向かった。

糸玉の糸は、どんどん、どんどんのびていき、海のむこうにとどいた。ランプのしんつくりと妻は、糸の上を渡って海岸にたどりつき、最初の家にもどった。

糸玉の糸は、ぐるぐるまきあがっていった。すると、糸にしばられていた七人の英雄が引っぱられて、ひとりが海に落ちてしまった。英雄は、おどろいて、大きな悲鳴をあげた。町の男が聞きつけて、

「王さまの英雄が、海へ落ちたぞ」とさけんだ。別の男がこれを聞いて、

「その英雄を助けだせ。海から引き上げるんだ」とさけんだ。すると、おおぜいの人たちが集まってきて、騒ぎだした。
「いったいどうしたんだ」
「あやしいやつがここにいたんだ。黒い目のゆうれいだった」
「そいつは、おれたちの肉をぬすんで食べようとしたんだ」
「いや、そいつは、王さまを食おうとしたんだ。うでずくで連れさって、食おうとしたんだ」
「いや、そうじゃない。そいつは、バラの花よりも木イチゴの花よりも美しい王さまのおじょうさまをうばいとろうとしたんだ」
みんなは、王の娘をさがしてかけまわった。けれどもどこにも見つからない。王の娘は何ものかにつれさられてしまった。けれども、みんなは、
「そいつがほしかったのは、王さまのおじょうさまだけなんだ。おれたちの命じゃない」と思って、大騒ぎをやめた。
ある日のこと、銀の糸玉が、ランプのしんつくりにいった。
「さあ、家の中に入って、しっかりかぎをかけてください。敵の軍隊がこちらへ向かっています」
ランプのしんつくりは、妻といっしょに家の中にとじこもった。そして、戸口を、生木で作った五つのかぎと、乾いた木で作った六つのかぎでしっかりとざし、じっと息をこらした。
仲間たちは、みな、家の外でみはっていた。
とつぜん、遠くの方から敵の大船団がおし寄せてきた。まるで、枯れ木が立ちならんでいる陸地が、そのままこちらへ向かって動いてくるようだ。大船団が海岸に着くと、敵の兵たちは、すすがあたりに広がるように、嵐に散らされた砂ぼこりのように上陸してきて、ときの声をあげた。
そのとき、ふいに、ランプのしんが高いほのおをあげた。ほのおは、激しい勢いであたりに広がり、雷のようなすさまじい音がとどろき渡った。そのうちに、ほのおの勢いはしずまり、ついには、水をかけられたように消えていった。
けれども、火がすっかり消えてしまう前に、七羽のがちょうが空高くまいあがった。がちょうたちは、かなきり声をあげてさけび、羽をバタバタさせた。そのうちに、それもしずかになっていき、やがて、ブンブンうなる蚊の羽音のなかへ消えていった。
こんどは、木のかぎが飛びあがった。木のかぎは、まるで森の精のように激しく、地獄の悪魔のようなうなり声をあげた。しばらくすると、それもしずかになり、ブンブンうなる蚊の羽音のなかへ消えていった。
つぎに、麻のむちが飛びあがった。むちは、ぱちんと音を立てて水の中の海獣のようなうなり声をあげた。けれど、やがてこれもしずかになり、ブンブンうなる蚊の羽音のなかへ消えていった。
すると、こんどは、おのが高く飛びあがり、続いて銀の糸玉も飛びあがった。そして、うなり声をあげながら、おのはあたりを切りまくり、糸玉は、自分の糸をかきむしった。

それも、やがてしずかになっていき、あとにはただ、ブンブンうなる蚊の羽音だけがひびき渡った。

それから、二日と二晩、三日と三晩がたった。

ランプのしんつくりは、家の中で聞き耳を立てた。いつのまにか、あたりは何の物音もしなくなっていた。そこで、厳重にかぎをかけた戸をあけて家の外に出てみた。生きている敵はひとりもいなかった。

ランプのしんつくりは、あちこち探して回り、銀の糸玉のきれはしを見つけた。探しつづけていくと、こんどはおのが見つかった。おのは、刃がすっかりかけていた。なおも探していると、麻のむちの先と柄が見つかった。こなごなにくだけてしまった木のかぎも見つけた。ランプのしんつくりは、七羽のがちょうを探した。やがて、まず羽が見つかり、それからくちばしが見つかった。とうとう最後に、ランプのしんが見つかった。ランプのしんは、燃えつきそうになりながらも、ほんのわずかな残りがまだ赤く燃えていた。

ランプのしんつくりは、それらをぜんぶ集めて高だかとかかげ、海に投げ入れた。

そのとたん、強い風がまき起こり、大きな波が立ちはじめた。波はしだいに荒くなり、高いうねりとなって激しくうち寄せてきた。そして、海岸に立つランプのしんつくりに向かって、まずランプのしんを投げかえし、それから七羽のがちょうを投げかえし、つぎに木のかぎを、そのつぎに麻のむちを、それからおのを、最後に銀の糸玉を投げかえした。それらは、海岸に落ちると、すべてもとどおりの形になった。

ランプのしんと、七羽のがちょうと、木のかぎと、麻のむちと、おのと、銀の糸玉は、砂の上でにぎやかに酒盛りを始めた。ランプのしんつくりと仲間たちは、丸七年お酒を飲みつづけ、丸六年、ごちそうを食べつづけた。すると、みんなは、森の精のように強く神々のようにたくましくなった。

みんながそろって町に帰ってみると、町はたいそう大きくにぎやかになっていた。

さて、この長い長い酒盛りでお腹いっぱい食べたので、人間たちは今でも生きていられるのだ。まだ死んでいなければ、これからもっと生きつづけるだろう。

これが私のメルヒェン、私のおとぎ話だよ。

村上郁再話

資料『世界のメルヒェン図書館１２』小澤俊夫編訳／ぎょうせい